

「東京新聞」の「平和の俳句」の11月に掲載された句から、紹介と感想を書きたい。篤く平和を求める句は大きな喜び、励ましになる。「満月を誰も撃とうと思ふまい 森悦子（63歳）」<いとうせいこう 円い月を攻撃して何になる。私たちは美しいものの前に無力であり、そうであることが人類の本来の姿なのだ。その良心を信じよ。>人は心が豊かに満たされている時は、見るものが美しく見えるという。戦争は人を獣にする。美しく見える世界を築きたいものである。「若者よ銃など抱くな人を抱け 荒木紀理子（60歳）」<金子兜太 率直な若々しい句だ。作者は若い男たちが戦場に放り込まれるのを、きつく心配している。銃を抱くな、人を抱け、その強さ。>与謝野晶子は「暖簾のかげに伏して泣く/あえかにわかき新妻を/君わするや 思へるや/十月（とつき）も添（そ）わでわかれたる/少女（おとめ） ごろを思いみよ/この世ひとりの君ならで/ああまた誰をたのむべき/君死にたもうことなかれ」と歌っている。愛する人を抱ける世であってほしい。

「蜉蝣（かげろう）や九一九（きゅういちきゅう）は憲法忌 大村森美（80歳）」<金子兜太 九月十九日未明、九条改悪安保法（戦える国化）成立。蜉蝣の例えうまし。><いとうせいこう あの日、大きなものが失われた。立憲主義、政治精神がカゲロウに。>市民が国会を取り巻いた翌日の九月十九日は忘れられないだろう。しかし「もう秋か燃やした怒りは消せぬまま 本東信子（70歳）」<金子兜太 九月十九日未明、安保法なるもの参院で可決、成立。平和憲法を守ろうとする作者は、怒り心頭に発している。怒りの念で書き切った句。>「安保関連法」は可決されたが、その後、九条を守り、廃案を目指す市民運動は止まることがない。変わらず、集会とデモが持たれている。私も続けている。

「兄を待つ七十年や鳥帰る 小松とみゑ（84歳）」<いとうせいこう 渡り鳥は帰る。それを七十年うらやみ続けた妹からの素直な一句である。亡くなったことを信じられず、自分だけ新しく生きることへの思い。>「母の靴はいて比島（ひとう）に父訪ぬ 重松淳子（73歳）」<いとうせいこう 戦地を訪れる慰霊の旅に、母の靴。父はかの地で戦死しており、その土を靴で踏む。接触はもうそのような形でしか訪れない。>高校生の時、友人が「ビルマの豎琴」の主人公は「私の父だ」と言っていた。後で聞いたが、彼の父はビルマではなく、フィリピンで戦死したらしい。彼は帰らぬ父を、日本兵の遺骨を收拾し、霊を弔うためビルマに残った主人公と思いたかったのである。

「平和の俳句 戦後70年」、江戸川区立小松川第三中学校の生徒たちの「生の声」から。「たくさんのいのちをつなぎここにあり 2年 石川杏」「敵味方命の重さみな同じ 2年 本間聖陽」「この戦争（つみ）を後人たちへ語り継げ 2年 糸井健人」。

「シールズのリズムに乗ってるおまわりさん 田部明江（67歳）」シールズ（自由と民主主義のための学生緊急行動）のメンバーのシュプレヒコールはラップ調でリズム感がある。警備するお巡りさんも足でリズムを取っていたという。若者同志で共感できたのであろう。楽しいではないか。「民主主義って何だ」という呼びかけに「これだ」と応答するシュプレヒコールは面白かった。「お日さまが星になるよなこわさかな 山上和子（70歳）」作者は「日の丸」のお日さまが「星条旗」の星になり、日本が米国の一部に飲み込まれてしまう危機感を抱いたという。「言わ猿の果てに奈落の焼け野原 中根康裕（51歳）」無批判な米国追従は、自衛隊が米軍の傭兵になりかねない。言わ猿から、正義と平和を追い求め、物言う市民になりたい。ならなければならない。